シロウなエミヤとセイバーと

しぐ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通り、新人マスター藤丸立香君とシロウなエミヤとセイバー、そしてマシュと空気なロマンでお送りする頭の悪い文章が主体のお話。

一話一話は短いので自称４コマ小説的立ち位置にいるつもり。

あくまで二次小説という事を承知の上、頭を空っぽにして読める猛者のみがこの先に通ってよし。

目次

そう、これは始まりである！ ―― 1
甘めな日々が始まる予感？ ―― 5
食堂での一コマ ―― 8
今日もいい話を聞けたところで。 ―― 18

そう、これは始まりである！

「サーヴァント・アーチャー。召喚に応じ参上した。……って、こんなの俺の柄じゃないんだけどな。まさか俺がこちら側に立つ事になるとは……。ああいや、こっちの話だ。ともあれ、よろしく。マスター」

褐色に白い髪が特徴の偉丈夫。名をエミヤ。アーチャーというクラスを得てはいるが、主体は近接戦闘という話だ。

「問おう。貴方が私のマスターか」

言わずと知れたアーサー王とはこのサーヴァントの事を言う。名をアルトリア・ペンドラゴン。戦い方は王道そのもの。風を操ったり、剣を見えなくする事も出来ると言う。王道とは。

「よろしく。召喚者がこんな新人マスターで申し訳ないけど……俺以外にマスターがいなくて。ああっと、俺の名前は藤丸立香。これから一緒に頑張ろう」

Ｄｒ．ロマンから人理を守る任を受けて数日が経ってようやくマシュ以外のサーヴァントを召喚する事が出来た。

そうして現れたのがこの二人。

さて、この話は人理修復はオマケでエミヤとアルトリアの二人に焦点を当てたものである。

時に近くから、時に遠くから。この二人を見守る事が、人理修復よりも重要な任務であると俺は早くも悟ってしまったのである。

「え、いや。放棄はしないでね」

しないよ。多分。

閑話的なアレ（文字数が足りなかった）

「マスター、私は貴方の剣でいてもいいですか？」

斬る事が使命。斬る為に存在する。マスターの敵を斬る為の刃。

「うん。どちらかどういうと恋人になりたいかなー」

そう嘯くマスターの眼は真面目で、私は思わずたじろいでしまう。

「いやだなーマスター。からかわないでくださいよー」

思わず茶化してしまって後悔する。何度も言ってくれるこの言葉

を、私は何度も茶化す。そして、いつもそう言ってしまう自分が嫌いになる。
「俺は本気だよ？　こんなに想ってるのに相手にされないのは悲しいなー」
その態度が、私の心を締め付けるんですよ。マスター、貴方のその気遣いが、私を思いやってそう言ってくれるマスターの心の裡が読めてしまいそうです。
私にその言葉を言って、茶化す度に笑顔の裏に悲痛そうな顔が見える。
「……ごめんなさい、マスター」
「あっ……行っちゃった」
ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。私もマスターの事が好きです。大好きなんです。
「でも、私は剣です。一振りの刃です。マスターの想いに応えられるとは思えないんです……っ！」
女としてではなく、剣として生きて、そうして私はここにいる。生前の生き様がなければ、マスターに出会う事も無かった。
「私はどうしたら……」
「生き方を変える必要は無いけどさ、やっぱり好きな人が思い詰めているのを見るのは辛いよね。ごめん」
「マ、マスターっ!?」
どうして、ここに。
「追いかけてきたらここにいたから話しかけようと思ったんだけど、色々聴こえてきて話しかけられなかったんだよね」
私は、マスターの、一般人に毛が生えたような人の接近にも気付かない程。いや、私の想いが聴かれて……!?
「あの、私、ええっと……ですね」
「難しく考える必要は無いと思うな。俺は英霊じゃないからわからないけど、もう英霊として登録されているんだし、その、第2の人生と同じようなものだって聞くから自分の好きなように生きてみたら？」
だって、私はこの生き方しか知らなくて。戦場で敵を斬って、斬っ

て、斬って。英霊になってからもそうあるとしか思っていなくて。私はこんな気持ちを持ってるなんて私も知らなくて。
「ああ、そんな悲痛な顔をしないでくれ。何かに追い詰められる顔も不覚にも可愛いと思ってしまったけど……いや、これ今言うべき事じゃないな。うん、俺も混乱してる。一回落ち着いてから話すべきかな」
　マスターが遠慮がちに笑って、離れようとする。私は、また、マスターにこんな顔をさせて……！
　何が剣か。何が刃か。私は……っ！
「マスターっ！」
「……ん、何かな？」
「あの、えっと……」
　待ってくれている。オロオロと次の言葉が出せずにいる私の事を。
　ああ、好きです。好きですマスター。大好きです。愛しています。
「好き……」
「え？」
「私はっ、マスターの事が大好きです！」
「……っ」
　マスターが崩れ落ちました!?
「だ、大丈夫ですかっ!?」
「いや、ちょっと力が抜けただけ。全然大丈夫」
　そう言ってくれるマスターの口元は手で覆い隠されている。ニヨニヨとにやける口元は片手では到底隠しきれていないのが、私ですらわかってしまう。
「……とーーーっても、嬉しくて。うん、凄く嬉しいよ」
「私、好きに生きてみる事にします。私の大好きなマスターが言ってくれた言葉ですからね。実践しますよ！」
「待って、そんなに大好きって言われると照れ死にしそうになるから！　待って、幸せすぎておかしくなりそう。あれ、これはもしかして夢……？」
「現実ですよマスター!?　ええっ、ちょっ、意識を手放そうとしない

で、マスターーーーっ!?」

「さて、次は冥府でティアマトと戦闘だって」
「ええ、分かってます。ご命令を、マスター」
「死なないように、俺を守りつつ頑張ってくれ」
「難しい要求ですね。でも、万事この沖田さんにお任せくださいっ！」

甘めな日々が始まる予感？

俺は見た！
セイバーがアーチャーに話しかけようとして中々話しかけられないのを。
俺は見た！
アーチャーが食堂でご飯を作っている時に「セイバー、これ好きだったよな……」なんて呟きながら作っているのを。
アーチャーはさながらエプロンボーイであった。いや違うそうじゃない。
「マシュ」
「なんでしょうか先輩」
「ロマンを閉じ込めるんだ」
「はい！　……はい？」
「二度は言わねえ！　ここから美味しい場面が見られるんだ！　邪魔者は閉じ込めるんだ！」
邪魔者（ロマン）、隔離。

運命の場所はそう、俺の部屋。
「実況は俺こと藤丸立香」
「解説は私、マシュ・キリエライトがお送りします」
「それぞれ割り当てられている部屋に忍者に扮した俺が手紙を出しておいた」
「はい、内容は『マスターは預かった。返して欲しくば俺の部屋に来い』。明らかに自作自演とわかる文章です」
「間違いは誰だってある！　いざとなったら令呪を使う」
「三画しかない令呪を切る気満々ですこのマスター！」
「仕方ないんだ……明日になったら回復するし使わないと勿体なくて」
俺は知っているんだ。回復するはずのなかった令呪をセイバーに

『わん』と鳴かせる為に使ってしまったあの日。アーチャーに怒られ、ロマンに怒られ、ダヴィンチちゃんにももちろんセイバーにも怒られた。

その後、しょんぼりしながら眠りについたが朝、目を開けてみるとなんと令呪が復活しているではないか！

これはＤＷ[神]が起こしてくれた奇跡に違いない。俺は神の存在を信じてる。

「マスター！　肝心の主役が来ません！」

「いや待て、足音がする」

「全く……いたずらは程々にしてくれ。一瞬びっくりしたじゃないか」

のこのこと　アーチャーが　あらわれた！

「ここでトラップカードオープン！　マシュ！　出口を塞げ！」

「わかりました、先輩！」

残念だったなエミヤ君。この部屋の唯一の出口は我が僕のマシュによって塞がれた。

「さあ、出でよ！　我が剣！　令呪をもって命ず。セイバー召喚！」

「マスター、まさかっ……！」

そのまさかだよエミヤくぅん……！

何やら面白い雰囲気を出していたのでちょっかいを出させていただき申した。令呪は回復するから許してね。

「マスター、いきなり何を……って、アーチャー！」

「どうやら、マスターは俺らの事を心配してくれていたみたいだな」

「そのようですね。では、この機会に聞かせていただきます。貴方はシロウですね？」

「ああ、あの頃とは全く変わってしまったけど、俺はずっと衛宮士郎だよ、セイバー」

おや、俺ら空気感出てきた。

「し、信用ならないので。私がシロウと別れる時に言った言葉をもう一度お願いします」

「『シロウ――――――貴方を、愛している』。……ああ、俺はこの言葉の

お陰でずっと戦っていけたんだ。改めて、ありがとう。セイバー。あの時言えなかった言葉を君に送ろう」
　ごくり。
「俺も、セイバーの事が好きだよ」
「私もです、シロウ。貴方といた日々のお陰で、あの停滞した場所が一気に色鮮やかに見えるようになりました。こうして、また貴方に会えたのです。ええ、マスターに感謝しなければなりませんね」
「ああ、そうだな。マスター……マスター？」
　僕もこんな体験したぁい……。
「先輩、大丈夫ですか!?」
「ああ……。俺はもう駄目だ。雰囲気に当てられて溶けそう」
「先輩っ！　せんぱぁーーーーいっ!!」
　ふて寝する。おやすみ。

食堂での一コマ

最近、エミヤが食堂でご飯を作っている時には必ずセイバーがいて、まるで家族みたいな雰囲気を出しています。

気分はエミヤご飯を食べに来た友人Ａ。

「バリ美味かー」

「そ、それはっ、方言というやつですね先輩！」

「ああ、博多弁って言うんだ」

「先輩は博多の出身だったんですねっ？」

「いいえ、似非なので」

「似非？」

「方言の真似をする事だよ」

あ、エミヤさんちーっす。

「セイバーのお代わりを作るからまたすぐキッチンの方に戻らなきゃいけないんだけどな」

「カルデアの備蓄が危機……!!」

まあ、備蓄なんて気にする俺じゃないのでその辺はロマンがなんとかしてくれると信じてる。

カルデアの地下には巨大な生産施設がある説を提唱してる。真相は闇の中。

「やはりシロウのご飯は美味しいです。シロウがご飯を作ってくれて私が食べる。あの日々ような生活がまた出来るとは思っていませんでした」

「セイバーさん食べてるだけで手伝ってなかったって本当？」

あれ？　そっぽを向いてどうしたんですかセイバーさん。

「まさかっ、本当に……」

「違うんです！　私だってホットケーキを作った事があります！」

「シロウの事を考えて？」

「そうです！　シロウの事を……って、何を言わせるんですかマスター！」

「セイバーをからかうのも程々にしてやってくれないか。アレは、う

ん、とても美味しかったんだ」
　惚気ですかそうですか。
　まあ、俺だってこんな存在作ろうと思えば作れるけど？　俺今人理修復しないといけないしそもそも人類滅んでるし？　仕事が忙しくて中々彼女作る暇も時間も無いだけだし？　全く、全然、これっぽっちも悔しくなんかないし？
「先輩の顔がすっごく悔しそうです！」
「そんな事ないよ、マシュ……全く悔しくないけどこれからレイシフトだしなんかいっぱい食べて働きたさそうなサーヴァントがいるなと思ってるだけで」
「えっ」
「安心したまえ、エミヤも一緒だ」
　いやぁ、アルテラは強敵でしたね。

自称4コマ小説の宿命
文字数が足りない事件

　――最後のマスターに全てを託した。
　――ああ、これでボクは消え去る。
　それでもいいと、人理修復をずっと支えてきた医者は思いながら。
　最後の宝具を唱えて、消え去った。
「――ン！　Ｄｒ．ロマン！」
「えっ？」
　自らが面倒を見ている少女、マシュ・キリエライトの声で目が醒める。
　何故？　消え去ったはずの自分が何故ここにいる？
「どうしたんですか？　そんな呆けた顔をして」
「ここは、何処かな、マシュ」
「何処って、ドクターの医務室ですよ？　まさか、熱でも？」
「いや、何でもないんだ」
　周りを見渡してみれば、それは確かに医務室で、まさにいつものマシュのバイタルチェックの時間ではないか。

「うん、今日も異常なし」
「はい、ありがとうございました。ドクター」
マシュが医務室から出て行って、ふうと溜め息をつく。
わけがわからないと頭を抱える。
「ボクは終局神殿でゲーティア相手に……それが何でカルデアに？」
夢か、と結論付ける。
ロマンが過ごした日々の残滓を追体験という形で見ているのだろうと。
本来はそうなる事はないはずなのだが、何分初めて使う宝具だ。こんな事がないとは言い切れない。
「なら、そうだ。楽しまなきゃ損かな」
気持ちを切り替えよう。神という存在がいるならこれが最期の思い出作りの機会を与えてくれたわけだ。
「そうだ、藤丸君に会いに行かないとな」
椅子を立って、歩く事が出来ているという事実に少しだけ感動しながらドアを出ると、そこには目的の藤丸がいた。
「あ、ドクター。ちょうど良かった。ちょっと手を切っちゃって」
「手を？　また何かやらかしたのかい？」
「やらかしたとは失礼な。エミヤに料理を教えてもらおうとして失敗しただけです」
「全く、君に何かあったらそれは人類の敗北を意味するんだからね？」
「わかってますよ」
懲りてないな、と藤丸の治療をしながら肩を竦める。
これで懲りるような性格であったらそもそも人理修復も出来ていないのだろうとも思う。簡単に処置した傷口をパシッと叩いて治療の完了を告げる。
「うん、できた。あんまり無茶はしないでくれよ？」
「前向きに検討させていただきます」
全く信用ならない言葉を吐いて逃げた藤丸を眺めながら、ふと思う。
――ああ、未練が残りそうだ。

楽しくて、これまで過ごしてきた日常をもう一度体験してしまうと消えてしまいたくないという気持ちが強くなる。
「この世界で、ずっと生きる事も出来るけど？」
「ああ、随分な誘いだな。さながら悪魔のようだよ、マーリン」
「親切な提案を悪魔とは、酷い話だ」
「安心しろ。ボクはちゃんと消えるさ。ただもう少し、もう少しだけ――」
この自身に生まれかけた未練が無くなるまで、と言おうとしてマーリンが居なくなっているのに気付く。
「タチの悪い幻影ってわけか。あの誘いに乗ってたらどうなってたやら」
もとより誘いに乗るつもりはなかったが、ここにいたいという気持ちにつられて乗っていたらと思うとゾッとする。
「考えても仕方ない、か」
マーリンの姿をした幻影の事はもう忘れるべきだろう。マーリンだし、不都合な事はすっぱり忘れてしまうに限る。マーリンだし。
ゆっくりと歩きながら、時折すれ違う職員に挨拶されながらもう2度と見るはずもないと思っていた施設を目に焼き付ける。心に、焼き付ける。
例え消えてしまっても、いつでも思い出せるように。
「ああ、矛盾してるなぁ」
存在を完全消滅した自身がこの夢から醒めたらどうなってしまうのか全くわからない。何もない空間に一人、独りでずっと居続けなきゃいけないのかもしれない。
――後悔はしていない。していない、筈だ。
臆病者である自身がこんな選択を出来たのは藤丸のおかげだ。だけど、やはり消えてしまうというのは、どうしようもなく怖い。
考える時間が出来てしまったのが余計にくる。
「いや、こんな気持ちになってちゃ駄目だな」
思い出を作ろう。
例え独りになってしまってもいつまでも思い出せるように。

記憶に刻もう。
全ての、カルデアの人達に届くように。
そうだ。ロマニ・アーキマンは存在していたという痕跡を、少しでも。
「まあ、ボクの最期の夢だから痕跡なんて……とは、思うけど」
誰の記憶にも残らなくてもいい。
自己満足でもいい。
感謝を、伝えよう。
藤丸に、マシュに、レオナルドに、カルデアの全ての人に。
「よし、行こう」
パン、と軽く頬を叩いて再度気持ちを切り替え、歩き出した。
「好調好調」
面白いくらいに職員達と出会う。
不思議と会話してる時には他の人は現れなくて、会話が終わってちょっと一息ついたところでまた次の人がやってくる。
なんて都合のいい夢だろうと自分でも思う。
何はともあれ、これであと残りは3人。
「レオナルド」
「やあロマン。あの二人に存在消滅したって聞いたけど」
「ああ、これから消滅するよ。でもその前にみんなに感謝を伝えに来たんだ」
「へえ、そんな事もあるんだね」
普段は見られない、目を見開いた顔だ。何事にも達観しているように見える天才、レオナルド・ダヴィンチがこんな顔をするのも珍しい。少し得意な気持ちになる。
「ありがとう。君がいてくれたおかげでボクはここまで来れたよ」
「なんだい改まって。私は私のやりたいようにやっただけだよ」
「うん、最期だからね。伝えたい事は伝えないといけないと思って」
「これからのカルデアは私に任せたまえ。この天才、レオナルド・ダヴィンチが残るんだ。最悪でも藤丸君とマシュの安全は保証しよう」
「――正直、ちょっと不安だった。君が座に還ってしまうんじゃない

かって。でもそれを聞いて安心したよ」
　還るなんて事は無いとは思ってたけど、それも絶対とは言い切れない。だから――そう、とても安心した。
「ありがとうロマン。そして、お疲れ様」
「こちらこそ、レオナルド」
　握手、そして抱擁。挨拶代わりの頬に触れるようなキスで締める。
　――あと、二人。
「マシュ」
「ドクター……っ!?　どうして!?」
「なんだいそのもう会えないと思った人に会ったような顔は。ボクはまだ消えてないよ、何故だかわからないけどね。うん、例えるなら神様がくれたきちんとお別れを言い合う時間って感じかな」
「――私、生き返ったんですよ？」
　唐突に、あわあわしていたマシュが放った一言目がこれだった。
「え？」
「フォウ君がビーストで、魔力を全部使って私を生き返らせてくれて。私は、ドクターが居なくなってしまったところを見ていないです。全部先輩から教えてもらいました。ドクターが実はサーヴァントで、しかもソロモン王だったなんて」
「……ボクは霊基的にも人間だったしわからないのも無理はないけどね」
　何やら特大の爆弾を放り込まれた気分だ。
　あの自身に懐いてはくれなかった犬のような存在が実はビーストだった事にも驚きだが、ビーストが人を生き返らせるとは。
「先輩と、同じくらい生きる事ができる身体になったんです」
　それは、何よりの朗報だった。
「――本当、かい？」
「はい。フォウ君が保証してくれました」
「そっか。……そっかぁ」
　マシュが普通の人と同じくらい生きられる、そんな事を知れただけでもこの夢を作り出してくれた存在に感謝しなくてはいけない。

「マシュ、君には本当に申し訳ない事をしたと思っている。悔やんでも悔やみきれない」
「いいんです、ドクター。それも含めて全部私で、こんなだったから先輩と出会えて、最後には私も普通に生きられるようになりました！私はドクターに感謝こそすれ、恨みなんてありませんよ」
「……本当にっ」
「ドクター」
　謝罪の言葉を告げようとして、マシュに止められる。
「最期の、お別れの言葉なんだからもっと違う事が聞きたいです」
「――それも、そうだね。ありがとう、マシュ。君が藤丸君を支えてくれたおかげで、ボクは少し楽を出来たよ」
「つまりドクターは私をダシに仕事をサボっていたと？」
「い、いやっ、違うんだ！　そういう事じゃなくて」
　ふふっ、とマシュが笑う。
　してやったりと言いたげな表情を浮かべている。
「やられた。ぐだぐだになってしまったけど、君が、普通を体験する事が出来ると思うと父親のような気持ちでボクはとても嬉しい」
「ええ、最期にまた会えて良かったです」
　ふっ、と煙に撒かれるようにマシュの姿は消えてしまった。
　――あと、一人。
「藤丸君」
「……ドクター」
「君もマシュと同じような顔をするんだね。このボク、ロマニ・アーキマンと話をする最期の機会だよ。どーんと思ってる事全てをぶつけるといいよ」
　胸を叩いて頼れる男アピールをする。
「軟弱そうな身体でそれをやっても全然頼りになるようには見えませんよ」
「失敬だな君は！　ボクだって常日頃考えて生きてるんですー」
「……そう、ですね。とても怖かったんです。普通に暮らして、普通に生きていくと思っていたらこんなところに連れて行かれて。今度は

補欠として過ごすのかなと思っていたら今度は俺一人が残っちゃったから、俺が覚悟を決めるしかなかったんですよね」
「強制させちゃったからね。……うん、本当に申し訳ない」
「いえ、謝罪が欲しかったわけじゃないんです！　でも、俺じゃないマスターが残っていたとしたら、犠牲になった人はもっと少なかったんじゃないかって、もっと上手くやれていたんじゃないかって」
　自信なさげに吐露する少年は、ゲーティアを倒したのだ。それは、間違いなくこの眼前の少年が成し遂げた偉業。
「ボクはね、思うんだ」
「……何を、ですか？」
「例えばレフがあそこで邪魔をしなくて予定通りに行っていたとしたら、例えば、君じゃなくてもっと魔術の素養に優れたメンバーが残っていたとしたら。断言しよう。もっと犠牲は増えていただろうし、そもそもゲーティアを倒せなかった」
「……そんな、事」
「君だからこそマシュはあれだけの宝具を使えるに至った。君だからこそあれだけの英霊が助けに来た。君の多くを助けたいという思いが、人を、英霊を動かしてこんな結末になった」
　だから、素直に誇るといい。
　俺はこんなに頑張ったんだぞって。
　俺は、他の誰もが成し遂げる事が出来なかった偉業を達成したんだぞって。
「……ありがとうございます、ドクター。……でも、そうですね。俺は、貴方に消えて欲しくはなかった」
　真っ直ぐな目で見つめられて、思わず視線を逸らしてしまう。
「あれは、そうするしかなかったんだ」
「ええ、分かっています。分かってはいるんですけど納得は出来ないってやつです」
「ボクはもう、十分に人間ってやつを堪能できた。改めて考える時間ができちゃったからちょっと――いや、かなり怖くなって来たんだけど。うん、やっぱりボクは何度繰り返してもあの選択をしたと思う」

「怖いんですよね、だったらどうして――」
「ボクは臆病者だし、勝てる戦いにしか出ない。有り体に言うなら、そう、藤丸君やマシュに愛と希望の物語を見続けて欲しかったから、かな」
「二度目、ですよ。その言葉」
ああ、別れが近い。
藤丸もそれを察しているのだろう。
「あ、そうだ！　是非藤丸君にはマギ☆マリのブログとか見てほしいな！　ファンになる事間違いなしだと思うけど!?」
「……もうお別れなのにそんな事言うなんて。それ、強制に近いじゃないですか」
「ああ、強制だ！　君はマギ☆マリを見る事を強制する！」
「……はい、わかりました。本物のマギ☆マリが見れるわけですし」
「あっ、いいな。ボクやっぱり未練が」
「――また、会いましょう。その時にいっぱい話してあげます。マギ☆マリの事とか他の事ととか、いっぱい」
「うん、さよならじゃなくてまたねの方が気分は良いかな」
光の粒となって消えていく。
決定的に違うのは、もう二度と会えないという事だ。しかし、それでも。
「またね、ドクター」
「ああ、また。藤丸君」
消えていく自身の身体を感じながらふと、思い出して藤丸の手を見てみる。
そこには、先程治療したはずの包帯も、傷跡もなかった。
――この夢は、ボクだけの夢ではな
真理に辿り着きそうになって、今度こそロマニ・アーキマンの存在は消失した。

不思議な夢を見た。
消えたはずのドクターが夢に出てきて対話をしたのだ。

「えっ、先輩も見たんですか？」
「という事はマシュも？」
　聞いたところによると、カルデアの職員達、さらにはダヴィンチちゃんも見たという。
「不思議な話もあるんですね」
「……そうだね」
　あれは、歴としたドクターのような気がする。消える前に、俺たちの夢に出てきてくれたような。
「うん、考えても意味ない事か」
「？」
「マシュ、マギ☆マリ見ようか。ドクターの遺言でね」
「えっ、いやでもドクターの遺言……」
「はーいお一人様連行ー」
「ちょっ、先輩!?」
「おや、君達何をしているのかな？」
「ドクターの遺言通りにマギ☆マリを見に行くところです。ダヴィンチちゃんも一緒にどうですか？」
「ああ、それは行かないとかな？」
　――俺は、あの約束をずっと忘れませんよ、ドクター。

今日もいい話を聞けたところで。

これまでのアーチャーとセイバーの関係から、アーチャーは現代日本に生きていたと言う事がうっすらとわかる。あまりに違和感が無さすぎてマシュに言われるまでその可能性に気付けなかったのは内緒。

「つまり尋問するという事だマシュ」

「誰に何をですか？」

「あれ、困惑しないのね？」

「もう突飛な事を言う先輩には慣れました」

まだ４話目にして慣れてしまうとは……。俺の後輩の対応力が高すぎる件について。

「エミヤに過去の事を尋問して吐き出させようと思ってな？」

「なるほど、エミヤさんが経験した聖杯戦争について聞こうという事ですね？」

「まあある程度そういう事だな！」

エミヤ、召喚！

「……で、俺の過去について聞きたいという事でいいんだな？」

「……はい」

英霊の膂力で殴られたんこぶが出来た頭を摩りながら肯定の意を伝える。

先に言い訳をしておこう、これは不幸な事故による結果なんだ。

エミヤを呼び出した時はエミヤはご飯を作っていてそれはチャーハンでそのチャーハンをこうくわっとやっている時でフライパンを持ったエミヤが現れて食堂に残されたご飯はそのままで落下して厨房は大惨事にな、なにを言ってるかわからねー（以下略。

「大変、申し訳ございませんでした」

深々と土下座を敢行する。

食べ物を粗末にしてはいけませんと、みんなに怒られてしまった。

これは頭が痛いので今日はレイシフト出来そうにない。

「うん、わかればよろしい」

「でも俺は、突発的な令呪の使用をやめることは無かった」
頭が割れそうだよ。

「……マスターと話してると話が進まないじゃないか」
「それは申し訳なく。こういう性格なもので！」
てへぺろとやってみたらエミヤとの距離がちょっとあいた。何故。
「俺は、ある程度普通の学生だったと思うんだ。切嗣が参加してた聖杯戦争の影響で街が燃えて孤児になり、切嗣に拾われて、少しだけ魔術を教えてもらって、高校に通っていたら聖杯戦争に巻き込まれてセイバーに会った。無事聖杯戦争に勝ってセイバーと別れた後は世界を巡って、守護者として世界と契約して。と、まあこんな感じかな。ざっくりとだけど」
普通とは何だったのか。
だれか彼に普通を教えてあげて!?
「そもそも英霊になるような奴が普通と言った時点で気付くべきだったか……」
今日もいい事を聞けた。さて寝よう。
「あれ？今日から特異点攻略だよ!?」
おやすみなさい。

以下、閑話

――犠牲は、大きかった。
マシュも、ロマンもいなくなってしまった。ゲーティアを倒す事は出来たものの、マシュもロマンもいないカルデアの雰囲気は、久方ぶりに晴れた外とは違いどんよりと沈んでいた。
ダヴィンチちゃんは一年ぶりに動き出した世界から俺たちを守るために一生懸命働いている。
カルデアの残った職員達も、人理を修復したからってやる事が無くなったわけではない。
「……これは、正しい結末だったのかな」

だれに聞かせるわけでもなく、そう独りごちる。
「いや、考えるのはよそう」
とはいえ、やる事が全くないのでどうしても何か考えてしまう。もっと上手く出来たことは無いのか、俺は本当に正しい判断を出来たのか。
変えようもない事がずっとぐるぐると頭の中回って、離れない。
「ロマンは、ずっとこんな気持ちを抱えて生きてきた」
そうだ、人理の焼却という変えようのない未来を見て俺より長い年月悩んできた人がいるじゃないか。
「マシュは、俺を守って戦ってくれたじゃないか」
戦う事が好きじゃない女の子は、サーヴァントとして立派に戦ってくれたじゃないか。
「俺は……」
守られて、守られて、守られて。
ロクに戦う力もないマスターが見捨てられないと前に出て何度マシュを、俺を助けてくれるサーヴァントを傷つけた？
何人、救えなかった？　救えるはずの人を、己の無力で何人殺した？
「うっ……」
迫り上がってくる吐き気をどうにか堪える。
……ああ、どうしようもなく弱い。
これだけで吐き気を覚えてしまうほどに俺は弱く、脆い。
ギリギリの綱渡りをクリアしてきて、どうにかこうにかゲーティアを倒す事が出来た。けれど、人理と引き換えに、大切な人が２人もいなくなってしまった。
「フォウ？」
「ああ……フォウ君」
トコトコとやってきたフォウ君を抱き上げて、ふとマシュの事を思い出す。
『そろそろ、頃合いかな』
え？　と、その声の発生源に気を向けるまでもなく。

視界がくるくると回り、地面についたと思えば、その先に。
――醜悪な姿の獣を見た。